

科目名	助産学実習 I Midwifery Practicum I
授業形態	実習
標準履修年次	1年次
実施学期・曜時限等	秋ABC・集中
実施場所	筑波大学附属病院
単位数	8単位
担当教員名	金澤 悠喜 Yuki Kanazawa 岡山 久代 Hisayo Okayama 川野 亜津子 Atsuko Kawano
ティーチングフェロー(TF)・ ティーチングアシスタント(TA)	TA配置あり(1人)
オフィスアワー等	オフィスアワーは特に定めませんが、事前連絡をしてから訪問すること 金澤悠喜 4B棟501室 ykanazawa@md.tsukuba.ac.jp 岡山久代 4B棟509室 okayama@md.tsukuba.ac.jp 川野亜津子 4B棟511室 AKAWANO@md.tsukuba.ac.jp
授業の到達目標 (学習成果)	1. 妊娠期の診断ができる 2. 妊娠期の助産ケアを科学的根拠に基づいて立案・実施し、評価できる 3. 分娩期の助産診断ができる 4. 分娩期の助産ケアを科学的根拠に基づいて立案・実施し、評価できる 5. 主体的に分娩経過を診断し、助産ケアと分娩介助が実施できる 6. 産褥期の助産診断ができる 7. 産褥期の助産ケアを科学的根拠に基づいて立案・実施し、評価できる 8. 新生児期の助産ケアを科学的に基づいて立案・実施し、評価できる 9. 新生児期の助産ケアを科学的に基づいて立案・実施し、評価できる 10. 褥婦と新生児の1か月健診および家庭訪問を実施し、評価できる
他の授業科目との関連	助産学特論Ⅰ、助産学特論Ⅱ、助産学演習Ⅰ、助産学演習Ⅱ、助産学実習Ⅱ
履修条件	助産師国家試験を受験するための必要な単位のうち助産学特論Ⅲおよび助産学演習Ⅲ以外の単位を修得していることを受講条件とする
授業概要	ローリスクの妊産婦および新生児の助産ケアについて、科学的根拠に基づいた実践が可能となる能力を習得する。また、助産実践の過程を通じて、対象への問題解決能力と個別対応が可能な能力、さらには高度専門職者としての助産観を育む。
キーワード	助産学実習 Midwifery Practicum 周産期技術 Perinatal Care 産褥期・新生児期ケア Maternal and Newborn Pracricum
授業計画	1. 分娩介助実習 10例 ・正常な分娩経過の産婦を受け持ち、分娩期の経過診断と分娩予測、健康生活診断を行う ・助産診断に基づき、ケアプランを作成・実施する ・分娩介助を行い、その後、退院まで褥婦と新生児のケアを行う。 2. 継続事例実習 1例 ・ローリスクで、経膈分娩が可能と予測される妊婦を継続事例として受け持つ ・妊娠中期から受け持ち、妊婦健康診査に合わせて外来実習を行う ・妊娠期には必要な保健指導を計画・実施する ・分娩介助を行い、その後、退院まで褥婦と新生児のケアを行う ・産褥入院中に必要な保健指導を計画・実施する ・産後2か月頃に家庭訪問を実施する

学修時間の割り当て及び授業外における学修方法	<p>実習120時間</p> <p>平日や休日の分娩待機時間を有効に利用して、分娩介助練習や指導案作成および記録に臨んでください。</p>
成績評価方法	<p><評価方法および配分割合></p> <p>実習での実践60%</p> <p>記録物(提出期限等を含む)およびカンファレンス40%</p> <p><評価基準></p> <p>評価基準評価の視点は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 個別性のある適切な助産診断および助産ケアを設定できる 2. 根拠に基づいた助産診断および助産ケアを説明できる 3. 実施した助産ケアを評価し、修正することができる 4. 実践した助産ケアおよび助産技術を振り返り、課題を具体的に導き出すことができる 5. 実践した助産診断および助産ケアを記録することができる 6. 保健指導案の立案および実施を行い、評価することができる <p>上記に対応した評価基準は次のとおりである。</p> <p>A+ 上記1～6を自身で達成できる</p> <p>A 上記1～6をほぼ自身で達成できる</p> <p>B 上記1～6を教員の指導を受けながら達成できる</p> <p>C 上記1～6を教員の指導を受けながら概ね達成できる</p> <p>D 上記1～6について教員の指導のもとでも達成できない</p>
教材・参考文献・配布資料等	<p>助産師基礎教育テスト 日本看護協会出版社</p> <p>産婦人科診療ガイドライン 産科編</p>
その他(受講生にのぞむことや受講上の注意点等)	<p>基本的に補修はできませんので、体調を崩さないように自己管理をしましょう</p>